

床に白い敷物、その上を様々な楽器が薙めき合う。周りを取り囲むように客椅子が並ぶ。12×5分、約60分の公演。



風巻はおもむろにマラカスを回す。自らも回転し、上体を折っていく。何時しかリズムが形成される。練習かと思わせるほどの自然なスタート。風巻の世界が始まる。



カウベルでアフリカの木琴を直接叩く。時折カウベル同士を当てると複雑な音となる。カウベルを垂直に打ち付けると倍音が消滅し、面を使用するとポリリズムとなる。異なる次元の音が生成する。



金属製の浅いバケツにシンバルを重ね、ウッドベルとマレットで叩く。音の幅が果てしなく広い。倍音を導いてはカットする。シンバルの響きの純度が増す。



小太鼓を足で押さえ、動かしながらスティックで叩く。リズムの変形により、トーキングドラムの発音が可能となる。



トイピアノの内部とミニガムランをマレットで叩く音は、金属性の胴長のバケツに反響する。バケツ自体も叩き、バケツ内で音程が生まれ、リズムと化していく。



浅いバケツの底を二つのカウベルで擦る。擦っているのに、叩いていることになるのが風巻の魅力である。ここにも倍音が発生し、合唱のように聴こえてくる。実音と倍音が共有するのだ。

右のみにして立ち上がり、強烈に擦り続けると全く異なる感触がする。カウベルを揺すり、角度を変えることによってまた音が変わる。発生した鋭い倍音は床に置くことによって封印される。



胡坐を組んだ足に小太鼓を挟み、右手にスティック、左手にウッドベルを持ち、同一に扱い演奏する。アタックとドローンが一体化する。ウッドベルはミュートの役割も果たす。



浅いバケツに小さなカウベル、フォーク、布を入れて一定のリズムを形成しながら掻き回し、時折バケツの底を床にぶつける。飛び出しても戻して続ける。遂にはフォーク二本のみになる。



そのまま立ち上がり、右手にマレットを持ち、アフリカの木琴を浅いバケツとマレットで演奏する。複雑な音の中に法則が生まれ、音楽は言語に変化していく。そこには時間が含まれている。



胴長のバケツのストラップを肩にかけ、底を面とし、左手の指と右手のマレットで鳴らす。自ら旋回し、音を画廊中に鑲める。終末の鐘の音にも聴こえる。



バケツを床に置き続ける。転がすことにより倍音がカットされ、叩くことによってまた生まれる。バケツはシンバル、カウベルを踏み、また新しい音を誕生させる。画廊はその音を吸収し記憶に止める。

